

一心寺かわら版

第五十号 令和二年九月発行

持名山一心寺

検索

コロナ禍の葬儀・法事に思う

新型コロナウイルスの感染拡大、未知の感染症に不安を感じ、緊急事態宣言が出された時には恐怖さえ感じたことでしょう。

特に、志村けんさん、岡江久美子さんという有名人の訃報には衝撃を受けました。

諸行無常ですから、悲しいことですが、病気になることもあれば事故に遭うこともあり、人生を終える時もあり通にはなりません。

しかも、コロナ感染によって亡くなった方は、臨終のお別れはもちらんのこと、満足に葬儀もできませぬ。遺骨になってようやく家族の元に帰ってくるという現実に一層胸が締め付けられます。

(帰ってきた岡江さんの遺骨を抱く大和田さん)



コロナ禍になってからの葬儀でお話を聞くと、ほとんどの方が息を引き取る家族を看取ることができていませんでした。それどころか、何ヶ月も前から病院・施設から面会を許されなかったという現実がありました。今生の別れの悲しさのみならず、さまざまな未練、後悔が残ったことでしょう。そのやりきれない思いをどのようにすればよいのでしょうか。

俳優で歌手の福山雅治さんのラジオ番組に「家族を語ろうよ」というコーナーがあります。そこで佐賀県の女性からの「おじいちゃんの十三回忌」についてのメールが紹介されました。

彼女のおじいちゃんは「盆か正月に死ぬ」が口癖でした。理由は「親戚が集まりやすい。命日にはたくさん集まってほしい」ということ。そして亡くなられたのが一月三日。口癖通りになったのです。それから年月が経ち、彼女の兄弟も家庭を持ち、正月であっても帰れないことも増えたそうです。

ある日、おばあちゃんから「今度、おじいちゃんの十三回忌だから帰ってきて。私も九十一歳、これが最後だと思うから」と連絡がありました。そんなことで親の兄弟六人分の家族がほぼ集まるにぎやかな正月となり、親族全員でつとめる法事に、おばあちゃんはほっとした様子でした。

そんな中、ひ孫にあたる十三歳の男の子が、曾じいちゃんが言っていた「盆か正月に死ぬ」という思いを知って、「深い」と感心したそうです。そして彼は、親族に向けて「目標ができたので、発表してもいいですか。ぼくも将来、正月か盆に死にます。これをうちの家訓にしたらいいと思います」と宣言したのです。

親族一同が拍手喝采。おばあちゃんは涙を流して笑っていたそうです。この便りを読み終えた福山さんは、「法事って、大切にするよね」と感慨深くおっしゃって、自身の父の十三回忌に感じた「わざわざ改めて集うことの大切さ」について語られていました。

十分な葬儀が出せなかった、最後を看取ることができなかった、また、最後のお別れができたかどうかにかかわらず「ああすればよかった、こんなことを言わなければ…」と誰にも言えない思いを残してしまうことは多々あります。

先のラジオに登場した家族と福山さんが感じたのは「集うことの大切さ」です。葬儀から何年経とうが、仏さまを中心に集まって、仏さまのことを思い出し、その思いを引き継いでいくということができれば、十分な弔いになりますし、後悔の念も和らぐことでしょう。

また、法事に集う方たちの存在によって、故人は、これだけたくさんの方々に支えられ、見守られ、生かされてきたと思えると自然に頭が下がります。そして自分自身も、今まで多くの人の温かな眼差しに支えられていたという実感が生まれます。亡き方と向き合う法事で称えるお念仏を通して、実は「人生の大切なことを見落とさないように」と仏さまから呼びかけてくださっていたと気づかされます。

感謝の気持ちをもって精いっぱい生きていこうと手を合わす姿を見て、仏さまは喜んでおられることでしょう。

現在はコロナ禍で、大勢の人が集うことはできないかもしれませんが、しかし、集うことができないう今を経験して、ようやく本当に「集うことの大切さ」を実感した気がします。早くコロナ禍が過ぎ去ることを願うばかりです。

万灯会&ぶちしるべ 報告

八月二十九日の「万灯会&ぶちしるべ」は、屋外中心で三密を避けることができると考え、予定通り開催しました。

今年も「よるしるべ」で好評を博している竹灯りと映像によって境内が美しく彩られました。新型コロナの影響でお祭りなどが中止となつて寂しい夏、「この夏、初めて子供たちに甚平を着せることができ、良かった」との声もあり、子供たちがそれぞれ願いや目標を書いて仏さまに手を合わせる微笑ましい姿を見ることができました。

灯籠が供えられた御仏前で、「新型コロナ終息を願って、豪雨災害の被災者を想って、世の中安穏なれ」と、参拝者と有縁の仏さまともに願いを込めてお勤めしました。



新型コロナ感染症第二波のピークは過ぎたという報道もありますが、まだまだ予断は許しません。しかし、マスク着用と手洗いで感染防止に大きな効果があることがわかっています。気を付けて行動すれば感染リスクは格段に減ります。心健やかに生活しましょう

芦田愛菜さんの「信じる」は真宗「信心」に通じる？

九月三日に行われた、映画「星の子」の完成報告イベントでの芦田愛菜さんのコメントが注目されています。

この映画は怪しい宗教を信じる両親に育てられた主人公の葛藤と成長の物語。主人公の林ちひろを演じる芦田愛菜さんが、映画のテーマである「信じること」についての質問に答えました。

芦田愛菜さんの「信じる」ということ

『その人のことを信じます』って結構使うと思うんですけど、それがどういう意味か考えた時に、その人自身を信じているのではなくて、自分が理想とするその人の人物像に期待してしまっていることなのかと感じて。

だからこそ人は裏切られたとか、期待していたのとか言うけれど、別にそれは、その人が裏切ったというわけではなくて、その人の見えなかった部分が見えただけであって、見えなかった部分が見えたときに、『それもその人なんだ』と受け止められる揺るがない自分がいるというのが信じられることなのかなって思ったんですけど。

揺るがない自分の軸を持つというのはすごく難しいじゃないですか。だからこそ人は信じるって口に出して、不安な自分がいるからこそ、例えば成功した自分だったりとか、理想の人物像だったりにすがりたいんじゃないかと思います。』

この受け答えが、とても十六歳の少女のものとは思えない、深く人生を捉えた哲学的なものであることに多くの方が驚きました。

この芦田さんの「信じる」ことへの理解が浄土真宗に通じると感じるのは私だけでしょか。

「確信」と「盲信」「妄信」

私たちは、普通、何かを信じようとする時、まず自分で確かめて納得しようとしています。自分で確かめた上で固く信じて疑わないことを「確信」といいます。それに対して、意味を理解していないのに、ひたすら信じてしまうことを「盲信」、正当な理由もなしに、ひたすら信じてしまうことを「妄信」といいます。

一般的に信といえ、この確信、盲信、妄信のどれかでしょう。

浄土真宗の「信心」

浄土真宗の信心は、自分の力で信じる「確信」でも、ただひたすら信じる「盲信」「妄信」でもありません。

その信心は「阿弥陀仏の大いなる慈悲の心」であり、「疑いのまじることがない、真実の信心」と言われます。

真実というのは、嘘や偽りでない、本当のことをいいます。

どんなに固い確信でも、どんなに純粋な盲信でも、揺らいだり壊れたりしていきます。なぜなら、それらは、無常の世界に生きる人間が作り出したものだからです。

時代や生活環境が変われば、心も様々に変わっていきますので、確信にも盲信にも必ず、偽りが混じってきます。

「あなたを必ず浄土へ生まれさせ、仏とならせたい」という阿弥陀仏の願いは、どんなに時を経ても、私がどんな風になろうとも、決して偽りでない、揺らぐことも壊れることもないものです。

浄土真宗で信心というのは、阿弥陀仏の心を用いなのであって、私の心ではありません。

親鸞聖人の法然上人への「信頼」

親鸞聖人(下)は

「たとえ法然上人にだまされて、念仏したために地獄へ堕ちたとしても、決して後悔はいたしません」(『歎異抄』)と、おっしゃられました。なぜ、これほどまでに人を信じることができたのでしょうか。



親鸞聖人は、法然上人(下)を勢至菩薩の化身であると敬っていました。

勢至菩薩は阿弥陀仏のはたらきを助ける存在ですから、法然上人への信頼は阿弥陀仏の大悲心と重なっているのです。揺らぐことはなかったのでしょうか。

芦田愛菜さん×浄土真宗

芦田さんの言葉に戻ります。

「その人のことを信じますって…自分が理想とするその人の人物像に期待してしまっていること」

これは確信や盲信のことでしょう。

「見えなかった部分が見えた時に、それもその人なんだと受け止められる揺るがない自分がいるというのが信じられること」

信じることを、そのまま(真実)を受け止められる自分がいることと捉えています。

「揺るがない自分の軸を持つというのはすごく難しい…不安な自分があるからこそ、理想の人物像だったりにすがりたいんじゃないか」しかし、自分は常に不安で揺らいでしまいます。

煩惱をはなれることができず迷い苦しんでいる私が、不安に揺らいでしまうのは当然のことです。確信、盲信にとらわれて、「揺るがない自分の軸」を持つのは難しいことです。

では、それを持つには、どのようにすれば良いのでしょうか。

「揺るがない自分の軸」を持つということ

「仏の願いの生まれ起こった始めから終わりまでを聞いて、疑いの心がないのを聞いているのである」



「まことによるこぼしいことである。心を本願の大地にうちたてて、念いを不可思議の大海に流す」 (『教行信証』)

阿弥陀仏は、私が迷いの世界で苦しんでいるからこそ、「あなたを必ず浄土へ生まれさせ、仏とならせたい」と願いを届けられています。それを疑いなく聞き受けたならば、私の心に仏さまの大悲心という軸が立ちます。

相変わらず私は揺れてはいます。しかし、私の中に立った揺るがない軸(信心)が安心を与えてくれることでしょう。

今回、芦田愛菜さんの「信じる」ことについての深い洞察から、学ばせていただきました。

お知らせ①

六月三十日をもちまして、真宗興正派西讃教区教務所長を退任しました。十七年間にわたって丸亀郡家興正寺別院内の事務所に勤務し、多くの方とご縁をいただき、様々な経験をさせていただきました。この経験を一心寺の運営にも生かしていければと思っております。

お知らせ②

以前、若坊守が撮影した「よるしるべ」での写真「あかりの灯る道」(下)が本願寺山口別院主催のフォトコンテストで入賞、遅ればせながら、その作品が公開されました。一心寺の境内風景を多くの方にご覧いただくご縁となりました。

